



カリエロ11

サレジオ会宣教ニュース N.36 - 2011年12月

親 愛なるサレジオ会宣教師の皆さん、サレジオ・ミッションの友人の皆さん、

イヴレアの最初の宣教志願院創設の90年後、2011年11月22日にインド・グワハティ管区のシラジュリに、シロンの故ヒューバート・ドロザリオ司教SDBを記念する新しい宣教志願院が開設されました。主に感謝します。7月から、すでに54人の修練準備期生と志願生が、海外宣教に生涯を捧げる意向で養成過程に入りました。

福者フィリポ・リナルディ神父の直観と先見の明により、1922年から50年にわたって息づいていたサレジオ会の宣教の伝統が、こうして復活しました。イヴレアの志願院が開設されて間もなく、イタリア各地(ペナン、フォリツォ、ガエタ、バニョーロ・クミアナ、トリノ-レバウデンゴ・コッレ・ドン・ボスコ)、スペイン(アストゥディージョ)、英国(シュリグリー)、フランス(コアト・アン・ドク)にも宣教志願院が開設されています。宣教志願院は、すばらしい、非常に実り豊かな神の道具でした。若者たちに提供される3、4年の養成は高い目標をすえた実際的なもので、特定の宣教地のニーズに応えるものでした(イタリアには修道士のために3つの支部、神学生のために5つの支部がありました)。宣教師たちは、15-18歳で宣教地に向けて旅立ちました。例えば、イヴレアのカリエロ枢機卿志願院だけでも開設されていた間(1922-1965)に1000人の宣教師を送り出しました。一部の教会の組織がそうであったように、1960年代後半、宣教志願院は閉鎖されていきました。

今、南アジアで宣教召命の新たな時代が始まりました。シラジュリの開所式にイヴレアの院長エリジオ・カプリオリオ神父と共に地域顧問が出席したことは、サレジオ会の宣教文化の起源との結びつき、そのインスピレーション、継続性の表れとなりました。この新たな事業に取り組むことになったグワハティ管区の勇気、宣教のビジョン、惜しみない心に感謝します。時を同じくして、近い将来、南インドに二つ目の宣教志願院開設の可能性があると報告も受けました。

シラジュリの志願院の養成担当者と若者たちに祈りをもって同伴して下さるよう、皆さんにお願いします。今日だけでなく、特に今後3年にわたって、サレジオ会宣教師を志す若者たちの召命の歩みがより明確な形を取るまで! キリスト者の助け聖マリアの導きと保護に皆さんをゆだねます。

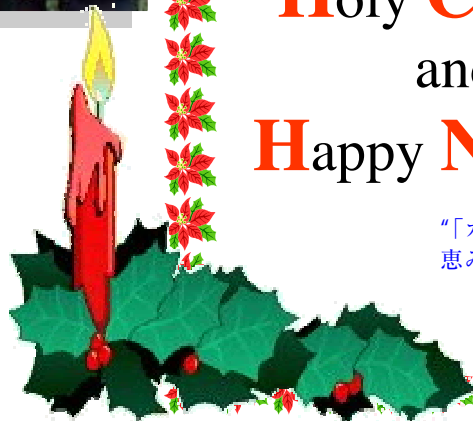


Vicelan Clement

宣教師顧問
ヴァツラフ・クレメンテ神父

宣 教師として日本に派遣された 5人の志願生

日本の文化や社会に溶け込めるよう、5人の若いベトナム人会員が志願生として日本に派遣されたことは、最近のサレジオ会では珍しいケースと言えるでしょう。ヨハネ・レ・ファム・ギア・フー、ヨセフ・グエン・ジャオ・ホア、ヨセフ・グエン・カク・ディエブ、アンデレ・トラン・ミン・ハイ、ヨセフ・グエン・ズイ・ヒュンは5人とも修練期を終え、修練期後の養成を受けている。彼らは調布の養成支部に新鮮な息吹を送り込んでいる。5人はトリノで宣教の十字架を受けてはいないが、福音を分かち合うことがたやすくはない高度に発展した国で宣教師として働くという、決して軽くはない十字架を担っている。



“Cagliari 11”
wishes
all its readers a
Holy Christmas
and a
Happy New Year

“「カリエロ11」より皆様へ
恵みに満ちたクリスマスと
良いお年を
お祈り申し上げます。”



子どものころ、アンゴラで働くウルグアイ人宣教師が時々私たちを訪問しました。15歳のとき、あるサレジオ会司祭が「サレジオ青年宣教ボランティア」というグループに私を誘ってくれ、モンテビデオ郊外の貧しい地域で初めて宣教活動を体験しました。18歳のとき、私は志願院に入りました。24歳のとき、サレジオ会員としての自分の召命は、すべてを置いて、イエスが望まれるところどこへでも行くことだと心の中で確信していました。その後の何年かは、個人的に祈り、識別をしました。その間、この呼びかけを実現したいという内なる望みは膨らみ続けました。知恵と賢明さをもって助言してくださった霊的指導者や神学院院長の助けは、とても重要でした。

ウルグアイには信仰を生きていない人が多いにもかかわらず、私は海外へ派遣される宣教師になりたいと望んでいました。宣教師になるということは、ある考えや個人的な願いから来るのではなく、神の呼びかけを見いだしたという確かさから来るからです。有り余るものの中からではなく、自分の貧しさの中から、自分自身と持っているものを分かち合うようにと教えてください。私はただ、受けた召命に忠実でありたい、後を振り返ることなくその道を歩みたいと望んでいます。

新宣教師研修コースは神様からの贈りものだったと感じています！ 宣教師の召命が生涯をかけたものであることをより明確に意識させてくれました。沖に漕ぎ出しながら、絶えず後にしてきた岸を振り返ることはできないのです。また、新しい宣教地に着任した宣教師は、子どもようになって学び、聞き、相手を尊敬しなければならないことを、謙遜に受け入れることを学びました。そしてそのような状況が、時には短気を起こさせたり怒りを生じさせたりするのも自然なことであると学びました。この研修コースは、古くからありながら現代も非常に大切なことを確認させてくれました。イエスを私の人生の中心とし、私の心のすべてを、永遠にイエスに捧げることです！

ルアンダ市の「リクセイラ」と呼ばれる最も貧しい地区に住むようになって3年がたちました。リクセイラとは「ゴミため」という意味です。しかし私にとって、リクセイラは神が本当に住まわれる人生の大いなる学び舎です。この学び舎で、オラトリオのアニメーターたちから短期間で学びました。ある日、彼らは悲しそうな、怒りに満ちた顔をして現れました。話をすると、そのうちの一人が私に言いました。「ここに来た白人のある人が……ぼくたちはその人たちの家にいたんだけど、家族の食事の時間になったから後でまた来るようになって言われたんだ。ひどい気分だった。」そのとき、私は気づきました。この学び舎では、家に誰かを招き入れる余裕がいつもある、2人でも10人でも！ ここでは人を歓待し心遣いを示すのがとても自然なことですが、残念ながら、私たちの文化はそれを失ってしまいました。門や警報装置に囲まれて暮らし、時には親友が「バーチャル」だったりするからです。抱擁、ほほえみ、パン、雨露をしのぐ屋根は、誰であれ差し出されないことはありません。明日、私の家で食事をし、休むのはあなたかもしれないのです。これが貧しい人々、イエスの友だちが教えてくれた連帯の教訓です！

こうして、この学び舎で、人生になくってはならないものはわずかであることを私は学んでいます。幸せは小さなことの中にあること、あるいはむしろ一人の方、イエス・キリストのうちにあることを！ 前から知ってはいましたが、ここ「ゴミため」で彼らと一緒にいて、このことを感じ、体験し、神様が許される限り、いつまでも楽しみたいと思います。

ウルグアイ出身、アンゴラの宣教師 **サンチアゴ・ボア・フィグ神父**



サレジオ会の宣教の意向

ブラジル-宣教ボランティア活動

ブラジルのすべての管区が、宣教ボランティア運動の成長を育むことができますように。

2011年サレジオ宣教の日の資料やビデオは、ブラジルのいくつかの管区の体験から得た洞察を提供しています。ボランティア活動の成長は、若者への教育的提案・司牧と召命指導、そしてサレジオ会共同体が一体となって関わることで、この両面から理解されます。私たちは、「子ども宣教師の会」から青年向けの宣教ボランティア活動に至るまで、あらゆる年代の子ども・若者の参加を望んでいます。短期の集中的な体験（クリスマス、復活祭、夏季・冬季の休暇）から、長期の奉仕あるいは人生の道の選択に至るまで、若者たちのグループに同伴したいと願っています。

